

# うたとかたりの対人援助学

## 第1回「食わず女房」の魅力

鵜野 祐介

はじめまして。立命館大学応用人間科学研究科で「人間形成学特論」という授業を担当しています。専門は教育人間学で、子どもたちが創造し享受し伝承してきた歌や物語や遊びや年中行事など「子ども期の伝承文化」と呼ばれるものが、彼らのパーソナリティの生成や変容にとってどのような意味を持つのかについて研究しています。

このたび、団士郎編集長からのお声かけにより、本誌に寄稿させていただくことになりました。うたうことやかたることが、人と人の関わりの中で果たす役割や機能について、具体的な歌やお話を例に取りながら考えていきたいと思っています。どこまで続けられるか分かりませんが、肩ひじ張らずに綴っていこうと思いますので、気軽にお読みいただけると嬉しいです。

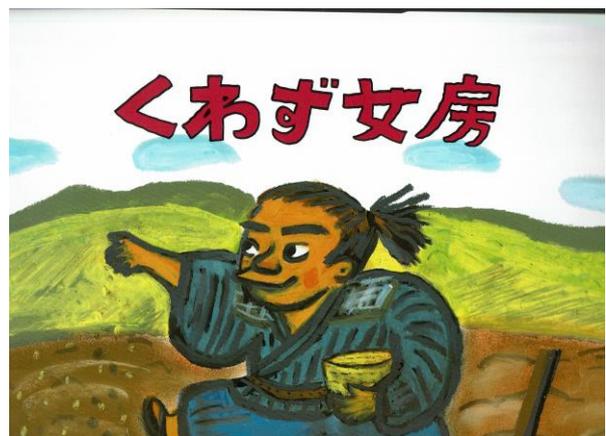
♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

### 紙芝居「くわす女房」を演じる

先日（2017年2月17日）、大阪府内のある幼稚園で年長組の約20名を対象に、紙芝居を演じる機会を持った。今回選んだのは「くわす女房」（松谷みよ子脚本、長野ヒデ子絵、童心社）。働き者で何も食べない女房がほしいと望むケチな男の所に、「おら、めしくわねで はたらく」という、「そりゃ

あいとしげな娘」がやってきて女房になるが、実は頭のとっぺんに大きな口を持つ山姥で、正体を知った男は山姥に食われそうになるが、すんでのところヨモギと菖蒲の呪力によって助かるという話である。

この年長組さんに紙芝居を演じるのは1年振りだったが、私のことを憶えてくれている子もいて、「紙芝居の人や」と声を掛けてくれた。週1回、彼らと絵本の読み合いをしている文庫のスタッフによると、今年の年長クラスは特にこわい話への関心が強いとのことで、私にも「こわいお話にしてください」とのご要望があったため、この話を選んだ。



### 「全然こわくなかった！」

はじめに、「今日はこわいお話をします」

と言うと、子どもたちは「全然平気だよ」とむきになって答えた。そして「食わず女房」と題名をよみ上げると、「知ってる」「よんだことある」「おっきな口の化け物の話なんだよ」などとてんでに声を挙げた。「こわくなったら、隣のお友だちに体をギュッとくっつけたら平気だからね」と言う、さっそく隣り同士、体を寄せ合う子もいた。

男がいなくなったのを見計らって女が火釜に飯を炊き、お握りをいっぱい作る場面あたりから、しだいに空気が張りつめてくる。固唾を呑んで紙芝居の画面を見つめる子どもたちの表情は真剣そのものだ。

そして、「なんと たまげた。かみ ふりほどくと、そこに でっかい くちが ばくりと あらわれた」——この画面になると、ホオーツという、どよめきともため息ともつかない声が漏れた。「よめこは りょうてに、にぎりめしを もって、あいた くちの なかへ ぼいぼい、ほうりこんでいく。おてだま とるみていに してよ。『にぎりめしや ペーろペーろ もひとつ ペーろペーろ』……」。ギュッと肩を寄せ合って聞き入る子どもたちの表情をうかがいながら、たたみかけるように一気呵成に語る。



「おしまい」、そう言った途端、子どもた

ちは一斉に叫んだ。「全然こわくなかった！」「えっ、ホントにこわくなかった？ 大丈夫だった？」「全然、平気だったよ」「ああ、そうか。もうすぐ小学生だからね。みんな大きくなったね」、子どもたちは満足そうに肯く。こわい話を最後まで聞き遂げられた達成感に浸っているようだった。

### 語り手にとっての快感

後日、幼稚園でのこのエピソードを、長年子どもたちに昔語りをしている女性Mさんにしたら、彼女もやはり、こわい話を子どもたちにする時に快感を覚えると口にされた。愉快的話を聞く時と、子どもたちの表情が全然違う。もちろん楽しそうに聞いてくれるのを見るのも嬉しい。けれどこわい話を聞いている時の、子どもたちの真剣なまなざしを見ていると、「よおし、もっとこわがらせてやろうって思うのよねえ」、Mさんはそうおっしゃった。

そう言えば、先年（2015年）亡くなられた元同僚で臨床心理学者の杉岡津岐子さんが、ご自身のふたごの息子さんたちと、絵本版の「食わず女房」をよく読んだと話しておられた。女房の長い髪がほどけて大きな口がパカッと開いて見える場面になると、杉岡さんはこう言ったそうだ。「実はね、お母さんの頭にもあるのよ」。そして、長い髪をザッと垂らして頭をかがめると、息子さんたちは大喜びしたという。それからは毎回この絵本を読むたびに、この「やまんばごっこ」をせがんだそうだ。

こうして、（もっとこわがりたい、そしてそのこわさを乗り越える達成感を味わいたい）と思う聞き手の子どもたちと、（こわがって喜ぶ子どもたちの顔が見たい）と思う

語り手や演じ手、双方の気持が相まって、「食わず女房」のようなこわい話は長い間語り継がれてきたのだろう。

### 語りの場における信頼感

それでは無条件に、子どもたちにこわい話をして構わないのだろうか。以前、国際アンデルセン賞受賞作家の上橋菜穂子さんが講演の中で、幼い頃お祖母ちゃんからこわい話をいっぱい聞かせてもらったが、お祖母ちゃんの膝の上だったから安心して聞いていられたと話しておられた。

同じ話でも、見ず知らずの人から聞くのと、家族や先生や顔なじみの人から聞くのでは、話の受けとめ方が全然違ってくる。主人公の身の危険を我が事のように受けとめて、物語の世界を冒険する子どもたちには、安心できる現実世界とどこかでつながっていることが必要だ。それには信頼感を寄せる語り手や演じ手の表情を見られることや、膝や手のぬくもりを感じられることが重要になってくる。

それからまた、その話を一緒に聞く友だちやきょうだいの肌の温もりや息づかいを感じられるかどうかも大きい。いわば、そうした信頼できる存在とつないだ命綱があればこそ、こわさに満ち溢れた物語の世界を冒険することができるのだ。そして最後にその冒険を無事やり遂げて、命綱をたよりに現実世界へと帰還することができるのだろう。

だから、幼い子どもにこわい話を語り読み合ったりする時には、ぜひ膝の上に乘せたり体をくっつけたり手を握ったりしてあげてほしい。それからお話が終わった後は、じっくり感想を聞いたり、体をぎゅ

っと抱きしめたりして、安心できる現実世界に戻ったことを子どもたちに実感させてあげてほしい。語りの場における信頼感の有無はとても大きな意味を持っているように思う。

### 「食わず女房」が語り継がれてきた理由

この話が長い間語り継がれてきた理由について、さらに考えてみたい。まず歴史的な背景として、近世から近代にかけての農村社会における貧困や飢饉による食糧不足の問題や、家庭における女性、特に嫁の立場の弱さが挙げられる。そこから生まれた、少食で働き者であることを理想とする嫁のイメージに対する異議申し立てとして、女性たちによって好んで語り継がれてきたと見ることもできる。

一方、深層心理学的に解釈すれば、美しい女性には毒があるという「女の魔性」に対する男性の恐怖心や警戒心、あるいはユング心理学の元型理論でいう「太母神＝グレートマザー」に呑み込まれ、死の世界へと引きずり込まれることへの根源的な不安感を読みとることも可能だろう。

洋の東西を問わず、＜食べる一食べられる＞モチーフを含む昔話や伝説は殊の外多い。それはおそらく、人類がたどってきた食をめぐる過酷な歴史の記憶をとどめておこうとする意志と、他のいのちをいけにえとして自分のいのちがあることに対する罪悪感や感謝の念が込められているからに違いない。そして、人びとのこうした想いは、こわさの感覚と結びつくことによって、よりしっかりと心に刻みこまれることになったのではないか。そんな気がする。